婦人の目

みやげは〝ミミパン〟

藤屋紀子

フィリピンを訪れた時、現地で働いているフィリピン人のシスターの話を聞く機会があった。

私たちの「この国の貧しい人びと、牢獄につながれている人、病気の人びとにいったい何かすることができるのでしょうか」という質問に、そのシスターは「まず、あなた方の国に帰って、自分の生活の中で実行してください。たとえば、今ある衣服で間にあわせるとか、食事の量を少しひかえるとか、そういうあなた方の小さな行為は、私たちのためにとても大きな支えになります」といわれた。

帰国後、わが家の朝食は耳パンを買うことにした。食パンの両端だけをまとめて売っている例のモノである。これだと食パン一本分が三十円で買える。一週間、朝食はこの耳パンと食パン一斤で十分である。そして、この耳パンが食べてみると意外においしく今までは、食パンの耳は取って食べなかったり、サンドイッチの端は捨てていた。が、それがわが家の朝食になるとは思ってもみなかった。そして、フカフカの食パンがいただける一週間に一度の朝食を、子どもたちは、まるで王様の朝食のように、大ごちそうだといって食べる。「これまでフカフカの食パンが、こんなにもおいしいと思って食べたことがなかったね」、というのが家族全員の感想である。

私たちは耳パンにして浮いた朝食代を貯めフィリピンに送ろうとは思っていない。ただ、私たちの生活の中に、まだまだ他の人のことを考えて生活することのできる部分がたくさんあることに気づいたことを、感謝している。今まで、バザーや教会の呼びかけにまず持参したものは、もうはかなくなったミニスカートだったり、私たちの生活の中で不用となったものだったことを思い出し、ほんとうに恥ずかしくなった。

諸聖人の通功という言葉がある。生きている私たちも諸聖人の功（いさおし）の中にくみ入れられて、何かを日々の生活の中でできるのではないか、という希望がわいてくる。フィリピン旅行のおみやげは、わが家ではこんな所にも生きている。

（主婦）